

教養的教育の中國語學習における 到達目標設定の試み

山 崎 直 樹

0 序

本稿は、第1章で、「到達目標」とは何か、そしてそれが何をもちたらすかを述べる。第2章では、筆者の試作になる、到達目標の例を掲げる。第3章では、実際に、どのような練習を行うか、の具体例を提示する。

1 到達目標というものについて

1-1 到達目標とは何か

到達目標とは、教師が、學習者に、「この學習項目については、これこれの訓練を通して、こういうことができるようになって欲しい」と提示する目標である。

學習者は、この提示された目標¹⁾によって、「この授業に出て、教師の要求する訓練を行えば、こういうことができるようになるのだ」ということを、事前に把握できる。

1-2 到達目標をなぜ設けるのか

1-2-1 學習者に對する義務

このような到達目標を、事前に、學習者に明示することは、本来、授業料を拂って學びに来ている學習者に對する、當然の義務である。

たとえば、各種外國語の検定試験では、獲得した点数・等級に應じて、「○が支障なく行える」のような表現で、その資格がどのような能力を保證するかが、示される。このような目安を明示することは、試験を実施する側が受験者に對して負う當然の義務である。同様の義務を、學校側は、學習者に對して

負っている、と考えてよい。

1-2-2 到達目標を設定することの利點

利點は、すべての授業間において、授業内容に統一性がもたらされることである。そして、授業内容の統一は、以下の利點を生む。

- a) 教材（教科書、副教材、および自作の教材）、試験問題の共有
- b) (a)の實現による非常勤講師の負擔の軽減

現在、出回っている多くの教科書は、練習問題が不足している。良心的な教師は、自ら、練習方法を考案し、教材を自作している。しかし、この時間のかかる作業を、非常勤講師に要求するのは、酷である。本来、副教材、試験問題などは、専任の教員が責任をもって、用意すべきものである。

- c) チームティーチングの管理

一週間に複数回の授業を設定している学校では、それらの授業を、複数の教師が、チームを作って、擔當することが多い。

この際、教師間で、解説・練習法・要求水準が異なっていると、學習者は混乱する。これを防ぐためには、チーム内で、さまざまな事柄について、緊密に連絡を取らねばならない。これは、教師に課せられた義務ではあるといえ、非常勤講師にとっては、過酷な負擔である。到達目標を共有していれば、このようなチームティーチングの管理は、容易になる。

- d) オリジナル教材編纂への蓄積

設定された到達目標に對して、實際の授業からのフィードバックを蓄積すれば、オリジナル教材の編纂も可能である。それは、その学校の事情に即した、使いやすい教材になるはずである。

- e) 授業水準の引き上げ

個々の教師が、個々の教材を、個々のやり方で教える、という方法では、授業の水準は、それぞれの教師の力量によって、大きく上下される。

現在、日本の大學では、常勤／非常勤、ネイティブスピーカーか否かを問わず、第二言語教育の専門家は多くはない。これらの非専門家による授業の水準を、専門家による授業の水準に近づけるためには、授業内容の統一等の統制が必要である。

1-2-3 授業体制の変更

授業内容の統一は、また、次のように既存の授業体制の変更も可能にする。

- イ) 學内で統一的な試験が実施できる
- ロ) (イ)の結果による能力別クラス編成が可能になる

1-3 到達目標の内容はどうあるべきか

1-3-1 學習者は何を望んでいるか

教養的教育として中國語を學ぶ大學生のニーズ⁽²⁾を見ると、運用能力の習得を望む聲がいちばん多い。つまり、中國語を、1)聞いて、2)話して、3)読んで、4)書いて、という能力を身につけたいのである(特に(2)に對する需要が高い)。學習者は、中國語の使い方を學びにきているのであって、中國語を理解しに來ているのでもなければ、中國語の文法を學びに來ているのでもない⁽³⁾。

1-3-2 言語行動に習熟することを目的とする

このような學習者像を考えると、到達目標は、文法・語彙の知識の獲得よりも、むしろ、ある特定の言語行動に習熟することに設定されるべきである。

そして、その到達目標に達することは、從來の多くの教科書で採られている、下に示す(1)aの表現で設定され、(1)bのような訓練を通して得られる技能によっては、不可能である。そうではなく、次の(2)aの表現で設定され、(2)bのような訓練を通して得られる技能によって、はじめて可能になる。

(1)a 使役の動詞“让”の基本的用法⁽⁴⁾を理解する。

(1)b “让”を使って、次の日本語を中國語に譯せ。

1. 父は、わたしを留學させてくれない。
2. ごめんなさい。お待たせしました。
3. わたしに、ひとこと言わせてください。

(2)a 自分がこれからしようとしていることを、相手の個人的領域を脅かさないよう配慮した言い方で、申し出ることができるようにする。具體的には；

- i) 自分が、それをする権利を保證されているわけでない行爲を、あえてすることを申し出る。

- ii) 見知らぬ人に、ぶしつけにならぬよう、ややひかえめな申し出をする。
必要な文法項目：使役文を構成する“让”，
導入のしかた：次の場面設定をする。

「あなたは、自分の所屬サークルの集まりに、入會希望者を連れてきている。他のメンバーに紹介しようと思う。しかし、彼らは、何か、熱心に議論をしている。『ちょっと紹介させて！』と聲をかけて注意を引くには、どう言えばよいか。」

このような場合、日本語でも、いきなり、「ちょっと紹介するよ」と話しはじめるのは、ぶしつけで、使役形を用い、「ちょっと紹介させてよ。」という言い方にして、(いちおう)相手に決定権があることを認めている形にした方が、ていねいに聞こえる、ということを理解させる。

次に、中國語でも同様な戦略が用いられること、すなわち、“我介绍一下”よりも、“让我介绍一下”の方がよいことを教える。そして、次のタスクを與え、考えさせる。

- (2)b 次の状況では、どう言ったらよいか。

1. まもなく中國に歸る留學生の送別會に出席している。あなたは、まず、ひとこと言いたい(あいさつをしたい)と思った。皆に、そう申し出よ。(【例】让我说几句。)
2. 道を歩いていたら、見知らぬ老人が、重いドアを開けようと、難儀しているので、あなたは、彼の代りに開けてあげようと思った。そう申し出よ。(【例】老大爷，让我来开开！)

(2) で示したとおり、筆者の意圖する到達目標は、[タスク]→[解決]という對からなっている。つまり、「目標に到達した」ということは、「與えられるタスクに對する解決能力を身につけた」ことを意味する。そして、このタスクは、文法的なものではなく、むしろ、表現機能的なもの、できれば、特定の場面に沿ったものを意圖している。

1-3-3 文法・語彙項目の選定だけでは不足

中國語教育における學習項目の選定、という作業自體は、すでに手をつけられている(日本中國語學會1995年大會で、関連する報告がなされた)。しかし、行わ

れているのは、學習對象となる、文法項目と語彙項目の選定である。もちろん、この作業は成されなければならない。しかし、特定の言語行動に習熟することを目的とする、という到達目標を掲げるのであれば、學習對象となる文法項目を明示しただけでは、教師側の要求する到達度を明示したことにはならない。

1-3-4 教科書の統一よりも到達目標の設定

同様なことが、「教科書の統一」についても言える。すでに、専任の教師が責任を持って、その學校で用いる教科書を選定している機關も、いくつかある。しかし、問題は、教科書を統一しても、それが、授業内容の統一、授業水準の保證には、直接結びつかない、ということである。

なぜなら、多くの教科書が、「その課のポイント」として挙げているのは、學習對象となる文法項目であることが多く、それは、いったい、どのような表現機能を持った形式であるのか、どのような場合に使われるのか、その形式を、學習者に、どう導入したらよいのか、そして、どのように訓練を行うべきか、などをきちんと解説したマニュアルは、ないからである(少なくとも、筆者は、見たことがない)。

2 到達目標の試案(一部分)

以下に、筆者が、到達目標として考案したものの一部分を載せる(學習項目として必要なものを、すべて網羅しているわけではない)。なお、練習方法などは、既存の教材で採用されているものを参考にした部分も多く、すべてが、筆者のオリジナルではないことをお断りしておく⁽⁵⁾。

【例1】

學習項目：動詞の辭書形のアスペクト

解説：裸の動詞が表すアスペクトのひとつに、「習慣的動作」がある。

到達目標：習慣的に行う動作を記述できるようにする。具體的には、自分の日課を記述することができるようにする。

例：6:00, 起床, 7:00, 吃早饭。

練習方法：必要な語彙を與え、自分の日課表を書かせる。記述は、文の體裁を

成している必要はない（この形が出てくるのは、最初期であるから）。上例のように、フレーズの羅列でよい。

【例2】

學習項目：“A是B”の構文

到達目標：目の前にある、あるものについて、それが何であるか、説明できるようにする。具體的には、名所・舊跡の案内ができるようにする。

例：这是“大阪城”，是丰臣秀吉建造的。

練習方法：この構文は、ごく初期で導入されるので、「これは～です。…が作りました。／…頃、作られました。」程度の内容に限って、名所・舊跡の案内をさせる。名所・舊跡は、その大學のある土地のそれでもよいし、中國の名所舊跡でもよい（このばあい、教師が、あらかじめ、その寫眞や由来等の資料を、作製しておく必要がある）。また、學生自身の出身地の名所舊跡でもよい。

【例3】

學習項目：形容詞述語文

到達目標：何かを見て、自分の感想を述べられるようにする。

例：真可愛！ 很难看！

練習方法：形容詞と副詞をいくつか、あらかじめ、導入しておく（形容詞：可愛、好看、难看、奇怪、可笑、可怕。副詞：非常、很、不太、很不）。學生同士をペアにする（A、Bとする）。片方に繪を描かせる（牛、馬、猫、犬、パンダ…）。次のタスクを與える。

A：あなたは、繪を描いた。友人に聲をかけて、繪を見せ、感想を求めよ。

B：友人から、繪を見せられた。何が描いてあるのか確めたいえ、感想を述べよ。

※意圖しているのは、次のような會話である（一例）。

A：你看！ 怎么样？→B：这是什么？→A：这是猫。→B：真的？ 很难看。

【例4】

學習項目：文末の“了”

到達目標：新たに起こった出來事を表現できるようにする。具體的には、人の身に起こった變化を伝えられるようにする。

例：她回国了。他住院了。他死了。

練習方法：

- 1) 次のイラストを載せたシートを配る。
 - a) 李紅が、歸國したところ。
 - b) 張力が、入院したところ。
 - c) 王明が、昇天したところ。
- 2) 教師は、“李紅同学，今天還沒來，她怎么了？”などと尋ねる。學生は、イラストを見て、當該の人物に起こった變化を告げる。

【例5】

學習項目：「動詞+“了”+名詞句」の文型

到達目標：相手にとって未知の、ある物／人を話題にした短い物語を語れるようにする。

例：昨天我认识了一个中国留学生。他叫张力，在广岛大学学法律学。

練習方法：自分が、買ったもの／知り合った人の話をさせる。あるいは、日本語で書かれた資料を渡して、それに基づいた物語でもよい。

注意：「動詞+“了”+名詞句の文型」では、文の焦點は、新しく談話に導入された最後の名詞句にある。この文の後には、この名詞句を話題にした文が續きやすいことに、注意を促す。

【例6】

學習項目：“V得”構文

到達目標：人の技量を譽めたり、けなしたりできるようにする。具體的には、何か、人に依頼されたとき、自分の技量の不足を理由に、その依頼を断ることができるようになる。

例：不行，我跑得很慢。

練習方法：次のタスクを與える。

- 1) 異性の知り合いに、文通を迫られました。字が下手なのを理由に、断ってください。
- 2) 友人に、晩飯を作ってくれ、と頼まれました。料理が下手なのを理由に、断ってください。
- 3) 運動會に出てくれ、と頼まれました。適當な理由をつけて、断ってください。

【例7】

學習項目：「できる／できない」の“会V，能V”

到達目標：自分にできること，できないことを提示する。具體的には，自分の習得した技量／資格，あるいは，自分が許容できる労働条件などを提示できるようにする。

例：我会开车。我不能加班。

練習方法：就職試験の面接という設定にする。教師が，面接官になって，「車の運転はできるか，英語は話せるか，残業はできるか，単身赴任はできるか？」などと，質問攻めにする。次に，學生同士をペアにして，練習させる。

【例8】

學習項目：“把”を使った構文

到達目標：目の前にあるものに対して，それを「～せよ／しよう」と指示を出せるようにする。

例：把窗户关上吧！

練習方法：友人と汽車旅行をしている，という場面を設定する。相棒に対して，「荷物を綱棚に上げよう。」「トンネルに入る。窓を閉めよう。」「もう驛だ。荷物をおろそう。」などと，指示をさせる。

3 練習の行いかたの具體例

以下に，設定した到達目標に沿った，實際の練習のしかたの例を挙げる。教師用マニュアルを意識して作成したものである。

學習目標となる言語行動：何かあるものが，どこにあるか，たずねる。それに答える。具體的には，ある場所における案内係が，勤まるようにする。

學習目標となる表現：××在哪儿？ ××在…。

必要な既習項目：请问，谢谢，不谢などの表現とその機能は，既習である方がよい。

準備する道具：「案内係」の役割を擔當するものにもたせる。

- 1)（架空の／實在の）學校の中の主な建物の配置圖。“食堂，礼堂”などが書き込まれている。

- 2) 建物の構造圖。“第二会议室，第一会议室，男厕所，女厕所”などが書き込まれている。

練習方法：以下の(1)～(7)を、順次、行う。

- 1) 状況設定：今、あなたの學校で、日本と中國の學術交流の催しが開かれていて、中國から、たくさん賓客が訪れている。あなたは、その受付で、案内係をしている。
- 2) まず、教師が、案内係になり、適當な學生に、「中國からの賓客」の役をやらせ、ものの所在をたずねさせる。【例】食堂在哪儿？
- 3) 上記のようにたずねてきた場合、“請問”が既習であれば、それを使うべきであることを気づかせる。例えば、「いきなり、本題に入るの？ ずいぶん、ぶしつけだね。」と試してみる。
- 4) 要するに、次のような發話を引き出せばよい。【例】請問，食堂在哪儿？
- 5) 案内係である教師は、答えを示す。【例】(圖上の一點を示して) 食堂在这儿。
- 6) ここで、質問者である學生が何も言わないようであれば、「禮のひとつも言わないの？」とからかう。もちろん、教師は、學生の謝辭のあとに、おきまりの返事をする。【例】賓客：谢谢。案内係：不用谢。／没什么…
- 7) 次は、教師が賓客になり、適當な學生に、案内係をやらせる。【例】請問，廁所在哪儿？
- 8) 學生が、スムーズに受け答えができないようであれば、準備した小道具のうち、「建物の構造圖」の方を用いて説明するよう、導く。要するに、次の行動を導き出せばよい。【例】(圖上の一點を示して) 廁所在二楼。
- 9) 學生同士をペアにし、それぞれ、役割を振って、練習させる。

發展・バリエーション：“學校里有沒有邮局？”のような表現が既習であれば、次の練習もできる。

- 1) 地圖に、“邮局，自动出納机”のような、必ずしもあるとは限らないものも書き込んでおく。
- 2) 適當な學生に、「郵便局がどこにあるかたずねてごらん。」と指示する。いきなり、上の(4)のような所在をたずねる言い方をした場合、「まず、あるかどうか確かめた方がいいんじゃないの？」と注意する。

3) 要するに、次のような發話を引き出せばよい。【例】請問、學校里有沒有郵局？

4) あとは、上と同じように續ける。

目標に達しているかどうかの測定：例えば、次のようなテストを行う。

1) 百貨店内部の見取り圖を用意する。

2) 學生を案内窓口の係員に見たて、いろいろなもの（例えば、トイレ）の所在、あるいは、あるもの（例えば、喫茶店）が、その百貨店の中にあるのかどうかをたずね、適切な應答ができるかどうかチェックする。

注

- (1) それは、もちろん、本稿で、後に示すような明示的なものでなければならない。「中國語の基礎を習得する」という抽象的な記述であってはならない。
- (2) これは、筆者が、毎年度、筆者の擔當するクラスで行うニーズ調査による。
- (3) ちなみに、筆者の行った調査によると、大部分の學生は、大學入學以前に経験した外國語（主に英語）は、傳統的な、いわゆる「リーダー」「グラマー」という二分法で學んだ。そして、多くの學生が、そのような學習法に飽いており、加えて、それにより身につけた技能が、實際の運用にあたって、どれほど効果を持つものか、という不安を抱いている、という傾向が見て取れる。
- (4) このような場合の「基本的用法」とは、文法的な用法のことを指していることが多いことに注意。
- (5) 例えば、“把”構文の練習の際の場面設定などは、『新訂・例文中心初級中國語』（牧田英二・楊立明、同學社、1993）の第15課の本文の状況を、そのまま、取り入れた。その他、日本語の教科書、例えば、『クラス活動集101』（高橋他、スリーエーネットワーク、1994）などを参考にした。

特記

本稿は、一言で言えば、日本語教育の成果を、中國語教育に取り込む試み、である。個々の、中國語に即した具體的な到達目標、練習方法のほとんどは、筆者がまとめあげたものである。しかし、方法論やアプローチのしかたは、日本語教育の成果を参考にしたものであり、そして、そのほとんどすべてを、山崎深雪氏から教わった。また、氏には、練習法のアイデアも多く提供していただいた。深く感謝したい。